

理事長に就任して

英国王立写真協会日本支部 新理事長



林 喜一

先日開催された理事会及び総会に於いて豊田前理事長の後を継いで、この度理事長に就任致しました。先輩理事が沢山おられる中での指名を受け、戸惑いながら考えた末にお引受けすることにしました。微力ではありますが、英国王立写真協会日本支部を会員の皆さんが喜んで下さる方向へ導きながら、運営して行きたいと考えています。

その一歩として日本支部の組織表を作り、それぞれの担当理事が職務を遂行して頂くことになりました。また初めて女性理事が加わりましたので、きめ細かな運営が出来るものと期待しています。

これからは会員の増強を図りながら、日本支部の拡大発展を進めて行きたいと思えます。写真を通して会員相互の気持ちが通じ合えるように協力しながら、和やかな雰囲気支部に育てて行きましょう。

また少しでも写真のレベルを上げられるように、英国の入選入賞作品についての勉強会等を、積極的に進めて行くつもりです。組織の風通しを良くして、名実共に誇りを持てるような日本支部の道づくりを考えていますので、ご協力下さいますようお願い致します。

写真下：新理事長（左端）を囲んでの懇親会



第7回リレートーク

「写真と音楽を通じたコミュニケーション」

9月2日、東京六本木の霞会館にて、第7回のリレートークを開催。

今回は、ミュージシャンとしても世界的に活躍されている高木陽光会員による、写真と音楽とトークのスペシャルイベントとして行われ、多数の一般参加者とともに、2時間を越える見事なパフォーマンスを楽しんだ。

サービス精神旺盛なパフォーマンスで、非常に高度なクラシック演奏やジャズのアドリブ演奏などで、オカリナの一般的な素朴で癒し系のイメージがみごとに打ち砕かれ、写真とのコラボによるプレゼンテーションにも魅了された。

紙面報告では、演奏をお聞かせできないのが残念だ。

「写真と音楽を通じたコミュニケーション」



高木陽光

「私は、音楽を仕事としてやっておりますが、写真も昔から楽しんでおり、本日は、「写真と音楽を通じたコミュニケーション」と題して、途中生演奏を挟みながらお話ししたいと思います。」

「まず、私のプロフィールを紹介させていただきます。写真活動に関しては、幼い頃から父（高木祥光会員）の影響で、カメラや写真の世界に触れていました。」

幼稚園ぐらいの頃から父に連れられ、よく行ったのが富士五湖周辺で、父が撮影している間、数台のライカを首にかけて、カカシのような役割の助手でした。あるとき、通りがかりのライカ愛好家が、高価なライカを何台も首から下げてる私を見て、父を叱りつけるという事件まで起こりました。

学生時代になると、音楽活動と並行して、写真部で白黒の現像なども楽しんでいましたが、2009年になって、念願のRPS会員となり、支部の活動にも参加するようになりました。

音楽活動に関しては、中学時代からオカリナやサクソに出会い、18歳からプロ活動を開始しました。現在は、亜細亜オカリナ協会副会長として、5カ国のリーダー的な人々とアジアのオカリナの振興のための活動をしています。また、オカリナ教室も4つ主催しながら、国内外で演奏活動を続けています。

ひとつ写真を紹介したいと思います。先日英国王室の結婚式を取り仕切った「カンタベリー大司教との出会い」の写真です。RPSに入会した同じ年に、日本でお会いする機会に恵まれ、そのとき何か英国との絆のようなものを感じました。この写真は、いつも机の脇に飾っています。」

（ここで、アイリッシュの名曲「サリーガーデン」をオカリナで演奏。）

続いては、支部写真展出品作品の三社祭の熱気にあふれ、殺気だった群衆の中で撮った写真や、秋葉御輿というアキバお宅系の人たちがコラボで作った御輿とメイド服を着た花魁などの作品を、くすぐりを交えたトークで楽しく紹介。

「ときには、撮った写真を見返すことから曲のイメージが浮かぶこともあります。では、夏祭りや花火のイメージから作った曲をひとつ演奏したいと思います。」

（オリジナル曲をオカリナ演奏。）

続いて、スタイリッシュな女性ポートレート作品や、今年の支部写真展出品のトラファルガー広場のライオン像と若い男女の写真、タワーブリッジバックにした母子の写真を紹介。さらに、所属する国際都市史学会の関係でヨーロッパに行くことが多いが、その際撮ったブリュッセルのグランプラスの夜景を紹介。

「では、音楽活動について、紹介したいと思います。まず、国内では、2006年に東京電機大学で公開講座を開きました。オカリナのルーツは、紀元前にも溯ることができるので、大変古い楽器から現代の最新のものまで「オカリナの歴史」について紹介しました。」

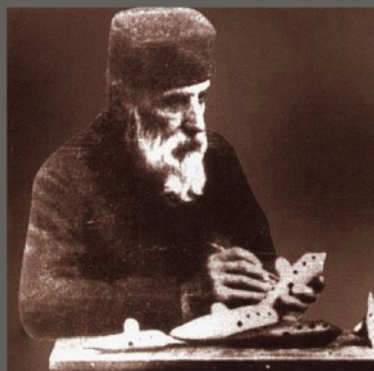
また同年、築地本願寺のパイプオルガンとの共演もしました。

2007年は、日韓友情音楽祭ということで、韓国のオカリナ協会の会長さんと門下生をお呼びして、コンサートを日本で開きました。

2008年には、瑞巖寺山内の円通院主催での演奏、さらに2010年に高崎市主催で「世界の楽器とその音色」というイベントに、門下生とともに参加しました。

また、毎年夏に品川イーストワンタワースのライブハウスなどで演奏をしています。」

「海外に関しては、2007年から在韓日本大使館の後援のもとに、韓国オカリナ協会と淑明女子大学で、「オカリナ演奏とその理解」というテーマで講演を行いました。」



また、夏には、門下生とともに韓国に行って講演を行っています。

2008年には在カンボジア日本大使館の招請で、日本カンボジア友好年事業に認定され、門下生とともにオカリナの講演に行ってきました。

2009年、台湾でのミュージックコアという、楽器フェアのようなイベントで、楽器のデモンストレーターとして演奏しました。

2010年にも参加しましたが、この年5カ国のオカリナリーダーによって、亜細亜オカリナ協会が発足しました。今年の3月には、イタリアのソレント・ブードリオ公演にも、門下生とともにに行ってきました。」

「オカリナは、イタリアの楽器で、管楽器ではなく壺状楽器です。オカリナの原理は、基本的にはビール瓶などをプーと吹くのと一緒ですので、管ではなくて壺を鳴らすこととなります。素材は主には土ですが、実際にはいろいろな素材があります。

起源は、四大文明、あるいはそれ以前にまで遡るといわれ、世界各地にあります。西洋音階を取り入れた「オカリナ」という楽器は、1850年代にイタリア人のジョゼッペ・ドナーティによって作られました。

彼は、もともと煉瓦を作る職人で、同じ窯で鳥寄せ笛を作ったのが、きっかけとなりました。

それ以前は、民俗音階や穴の数も少なく音階もなく、生活や宗教儀式、男女の愛の告白などにも使われたようで、人や動物など様々な形のものがあります。

現在も様々なものがありまして、イタリア式単管オカリナ、複数管オカリナ、イギリス式のオカリナ、さらに、フランス、アメリカのオカリナもあります。

今では骨董品価値の高いマイセンのペダル付のものや、ナスカの地上絵オカリナとか、ゲゲゲの鬼太郎が妖怪を退治するときの武器が、オカリナということで、ゲゲゲの鬼太郎オカリナというものもあります。

正規のオカリナでは、大きさがいろいろあり、それぞれ音域が異なります。

イタリアのボローニャ近郊のブードリオ村に始まったオカリナは、徐々にヨーロッパ全土に広がりました。

オカリナという呼称は、「オカ」（ガチョウ）＋「リーナ」（小さい、子ども）という意味があります。

また、イギリス式のもの、まん丸な形が特徴ですが、その発展系で「茶カリナ」というものもあり、茶碗の形をした楽器です。

茶道のようにお茶を点て、その器で演奏を楽しむ「茶カリナの会」も開いています。お茶を飲むときは、吹き穴の位置を外して飲まないとお茶が下の穴から出てきたり、音が変わってしまうので、注意が必要です。

イタリア式の音域は、1オクターブ＋3音で、イギリス式は、1オクターブ＋1音ですが、いずれも半音を出すことができます。素材によって、音の堅さ／柔らかさ、響きが変わります。

イタリアの10穴オカリナから12穴に発展させたのは日本の彫刻家で、音域を1オクターブ＋5音へと、楽器としての可能性を広げました。

写真左上：カンタベリー大司教との出会い

左中：ジョゼッペ・ドナーティ

左下：茶カリナ演奏会



写真：音程や形の異なる様々なオカリナ

最近では、演奏の可能性を広げるため、複数管の2オクターブのダブルオカリナや3オクターブのトリプルオカリナ、さらにクアドロプルという4連のものまであります。これはほぼバイオリンと同じ音域を持っています。

現在韓流ブームで、Kポップが大人気ですが、韓国ではオカリナも日本以上に盛んで、義務教育にも取り入れられています。ドラマなどでもオカリナがよく使われ、メーカーも沢山あります。

2000年頃には、韓国オカリナ音楽協会が設立され、老若男女幅広く愛好者がいます。

2010年に、日本、韓国、中国、台湾、香港が中心となって、亜細亜オカリナ協会が発足し、さらに最近ではベトナム、フィリピンでもオカリナブームが起りつつあります。

来年8月には名古屋で亜細亜オカリナフェスティバルが行われます。

ただ、世界的にはまだまだ珍しがられる存在で、イタリアでさえ知らない人も多いようです。」

「オカリナは、小さくて持ち運びが便利で、かつ値段も比較的安いので、初心者にも受け入れやすく、上級者になれば、非常に高度な演奏に挑戦することもでき、大変奥の深い楽器です。

指を使うので脳の活性化にもよいといわれ、リハビリにも使われています。また、音量が小さいので、日本の住宅事情にもあっています。

ではここで、少し楽器の紹介をしながら、演奏をしたいと思えます。」

（手の中にすっぽり入ってしまうような小さなものから、ゴージャスな大きなものまで。実際には、台の上に据え付けた巨大なものまであるそうだ。）

「指だけでなく、吹く息の強さでも音程を調節することができ、さらに指の開け方を微妙に調整することで、おもちゃのようなオカリナでも、練習すればかなり高度な演奏も可能です。」

（この間、アルフィーのテーマなどモダンジャズやスタンダードナンバーから、クラシックの名曲、涙そうそうなどのヒットソングまで、幅広い演奏を披露。）

「ここで、もう一つの楽器、サクソについて少し紹介します。

サクソは、ソプラニーノからコントラバスまで、全部で7種類あり、一見金管楽器のように見えますが、発音原理となるものが木管で、実は木管楽器です。

ベルギーのサクソ発祥の地ディナンを訪ねたことがあるのですが、現在では全く作られておらず、現地のお店にあったものは、ヤマハのものでした。

しかし、ユーロになる前は、発明者のアドルフ サクソは、ベルギー紙幣のお札の顔となっていたほど、ベルギーでは英雄だそうです。ディナンの街には、巨大なサクソのオブジェやイルミネーションがあり、サクソのミュージシャンなどがたくさん訪れるようです。」

(サクソの名曲「セントルイスブルース」熱演。)

「今年の3月後半には、門下生とともにイタリアに行き、ソレント市長さんの要請によって演奏をすることになりました。」

(名曲「帰れソレントへ」を演奏。)

この後、オカリナの里ボードリア村を訪れた時の模様をビデオで紹介。

「イタリアのオカリナは、クラシックが中心ですので、よく知られたクラシックの名曲「トルコ行進曲」を演奏しました。」

(オカリナによる見事な演奏に、会場は感動の渦に包まれ、アンコールでは急遽地元の世界的演奏家との共演も実現し、全く打合せもなく即興で演奏。)

「活動の様子は、現地のボローニャ新聞などにも大きく伝えられ、現地のプログラムには、大震災直後であったので、『がんばれ日本!』という励ましのメッセージも添えられていて、何かとても気持ちが伝わる思いがしました。

ここで、かつて著名なオカリナグループで活躍された演奏家の奥様から、大変貴重な写真2枚を託されました。本来であれば、博物館に置かれるべきと思われるような写真ですが、あなたにオカリナを広めて欲しいので、是非あなたに持っていていただきたいといわれました。

写真そのものは、小さく軽いものですが、思いのこもった大変重いものを託されたと感じています。イタリアから持ち帰ったものの中で、一番重いものです。こうした「メッセージを伝える写真」という存在もあるなと感じました。」

コンピューターを使ったコミュニケーションとして、私は、ホームページ、ユーチューブ、ブログ、フェイスブック、ツイッターなど、写真を使って様々な活動などを紹介したり、音楽に載せて写真のスライドショーと合体させたような作品も紹介しています。こうしたサイトには反響も多く、この春のRPS J長崎展の様子を送ってくれた人もいました。」

(ここで母校立教大の鈴掛の並木をちょっと思い出しながら「鈴掛の道」を演奏。)

「最後に、趣味として一級特殊小型船舶操縦士の免許を活かして、海外の人たちとの交流をしたいと思っていますが、水上バイクを楽しんだ海南島の海岸など、南国や海のイメージのオリジナル曲などにも取り組んでいます。

私にとって写真は、思い出や記念、記録として残したり、宣材として活用、メッセージを託したり、様々な役割を果たすと感じています。私の活動においてコンピューターが、

編集やコミュニケーションの幅を大きく広げてくれています。

私の中では、音楽と写真は、相互に刺激し合い、芸術にまで昇華できるものと感じています。

では最後に、そろそろ秋という時期でもありますので、オカリナとサクソで、名曲「枯葉」を演奏して終わりたいと思います。ありがとうございました。」



写真上：ディナン市のサクソ巨大オブジェにて
中：ベルギー紙幣のサクソとディナン市夜景
下：託された歴史的オカリナグループの写真

(編集後記)

なかなか予定通りに発行できず、心苦しいのですが、今回は高木会員のユニークな活動の一端が届けられれば幸いです。次回は、朝日新聞のカメラマンとして長年活躍されてきた上田会員のトークを中心に編集します。こうご期待。

(川村)